



イスラエル アンヴェールド Vol.2 「エラの谷」

英語版オリジナル 2018年2月11日公開

Israel Unveiled Vol.2: Elah Valley

<https://www.youtube.com/watch?v=e1QWTdcpEeg&t=5s>

メッセージ by Amir Tsarfati/Behold Israel : <http://beholdisrael.org/>

テル・アゼカへ、ようこそ。

テル・アゼカは、ユダ族の中にある二つの大きな町の一つで、エラの谷の真上にそびえ立っています。“エラ”とはテレビン（書記注：ウルシ科カキノキ属の落葉樹。この木から取れるテレビン油は、油絵の画溶液として使われる。）のことで、私たちの頭上にある、これがその木、テレビンの木です。



テレビンの木

エラの谷、すなわちテレビンの谷は、興味深い谷で、はるか南東から北西の方に延び、最終的には、ペリシテ人の町ガトまで続きます。そこで思い出すのは、イスラエルの地にやって来たペリシテ人の話、ダビデとゴリヤテ、継続していたイスラエル国家とペリシテ人との戦いです。

まず、ペリシテ人という本来の名前についてお話しますと、これは、士師記3章で初めて登場します（士師記3:3参照）。5人のペリシテ人の領主、恐らく彼らはペリシテ人が入植した5つの町の王でもあったのでしょう。つまり、ガザ、アシュドド、アシュケロン、ガト、エクロン。



地中海沿岸地図

面白い事に、ペリシテ人たちは決して、自分たちが元々住んでいた地名で自らを名乗ることはありませんでした。実は、彼らはギリシャの島の人間で、アレキサンダー大王や、後のローマ帝国が征服したのと同じように、彼らも食べ物や貿易目的で、ここを征服するためにやって来たのです。彼らの地は、激しい飢饉に見舞われて

いて、そのため彼らは領土拡大を求めていました。歴史上、ほとんどの国がそうであったように、領土拡大は富と戦力、そして、その地域における政治的地位を獲得するのが目的です。

さて、士師記に、ペリシテ人の5人の領主が初めて登場しますが、ここでイスラエルの民が、東からヨルダン川を渡ってエリコを占領するのとほぼ同時に、ペリシテ人が西からこの地に入って来ました。ここは7つの異邦人の国、つまりペリジ人、ヒビ人、エブス人、その他の異邦人たちが元々住んでいた地です。そこへ異なる二つの諸国が、ほぼ同時に入って来ます。

- ① 主であるイスラエルの神によって導かれた国、彼らの父祖に与えられた約束が基になっています。
- ② そしてもう一方は、純粋に経済利益のためでした。ちなみに、彼らの名前がその性質を証明しています。ペリシテ人という名は、「侵略者」という意味です。

ここで私たちは、二つのいわゆる「侵略」を目にしています。しかし一方は侵略者によって、そしてもう一方は元々、主であるイスラエルの神によって、その地を約束されている者たちでした。しかしここでは何一つ、白黒分かれていたわけではありません。

イスラエルの民が翼を持った天使で、ペリシテ人が槍を持ったドラゴンだったとか、そうではありません。そうではなく、

- ① 一方は約束に従って、神に導かれた人の集団、
 - ② もう一方は、彼らの欲望に従って、肉に導かれた人の集団、
- それだけです。

そこで皆さん、理解しておいてください。

イスラエルの民がかの地に入るのは、当時彼らが立派だったからではありませんし、彼らが聖人だったためでもありません。

神は、イスラエルの民に言われました。

「わたしが、これから彼らをその地に導き入れる。そして、わたしがそれを行う理由は、一つに、あなたがたの父祖たちに約束したためであり、もう一つは、この地にいる諸国の悪のためである。」

言い換えれば、これはあなたがたとは関係ない。

あなたがたが素晴らしいからではない。

ただ、わたしがあなたがたの父祖に約束をした為、そして、わたしは、罪の無い人の血が流されるのを見、この地に住む罪の無い子どもたちの嘆きを聞いたからだ。

イスラエルの地が「カナン」と呼ばれていたころは、カナン人が住んでいました。当時、カナン人の慣習で、非常におぞましい事が行なわれていたのです。

私の言う慣習とは、皆さん、理解しておいてください。

現在、ISIS が行なっていることに全世界が震え上がっていて、彼らの行う斬首や、レイプ、人身売買を犯罪だと叫んでいます。現代社会では、これが犯罪です。

しかし、現代社会では、犯罪とは、全て十戒をベースに理解されています。

十戒は「殺人してはならない」と告げています。

「殺人を計ってはならない」

「意図的に人を殺してはならない」

自己防衛で誰かを殺したら別問題で、それは“殺し”(killing)です。しかし、“殺人”(murder)は禁じられています。

それがなんと、この地元の人たちは、幼い子どもたちを器に入れて、下に火を点け、泣き叫ぶ子どもたちを焼き殺していました。



モレクに子どもを生贄として捧げる

それが、モレクや他の神々への礼拝だったのです。彼らは、男となるために儀式の初めとして、若い少女をレイプしていましたが、それはレイプではなく、慣習でした。彼らにとっては、あれも「赤子を殺す」のではなく、慣習でした。

このようにして、数えきれないほどの子どもたちが殺されました。

聞き覚えがありますね？

そして、数えきれないほどの数の若い少女が強姦されました。また、自分たちの処女を犠牲にして世を知り、世の規則を知ったのです。

聞き覚えがありますね？

そして見ての通り、これは神の目には忌むべきことだったのです。

神の目には、これは止めさせるべき事だったのです。

ですから神は、イスラエルの民をこの地に導く時、彼らに言われたのです。

「一人として、生かしておいてはならない。」

と、こう言うと、皆さんは

「ちょっとおかしくないですか？片方の国を特別扱いするなんて。」

と言うでしょう。

違います。

神は、実は、殺人を止めたかったのです。

時に、癌を終わらせるために切断も止むを得ないことがあります。

切らなければならないのです。

同じように神は、イスラエルの民をそこへ送り込み、それを行うように命じられたのです。もし、彼らがそれを行わなければ、この国が、彼らに対してそれを行うことを、知っておられたからです。神は、彼らの基準を高く上げておられたのです。それによって、彼らの周りの国々が、他に神はいないことを知り、神の基準が、当時のあの国の慣習よりも、はるかに高いことを知るために。

このように、イスラエルの民はその肩に大きな責任を背負って、イスラエルの地に入りました。

同時に、他の国が西からやって来ます。しかも彼らは、侵略者。

非常に興味深いのは、この侵略者たちは、イスラエルにはなかった面白い技術を持っていたのです。イスラエル人たちがまだ青銅器時代を生きていた時、ペリシテ人たちは鉄を持ち込み、鉄を熔解する技術を持っていました。しかし、鉄の溶解についてお話する前にお伝えしたいのは、イスラエルの民がこの地に入るにあたって遭遇する危険を、主であるイスラエルの神は、すでに見ておられたということです。その危険の一つは、もしあなたがたが彼らを殺さなければ、明らかに彼らがあなたがたを殺すだろう。しかし、あなたがたを殺すのは、必ずしも肉体的とは限らない。それは霊的であったり、精神的にもあり得ます。私たちがこんにち目にしているのは、肉体的に殺すことばかりではありません。精神的、霊的に死をもたらず、精神的、霊的な欺きです。そして、神がイスラエルの民に命じられたことが一つあるとすれば、それは、他の者たちのようになろうとしてはいけない。バラムが彼らを見た時、彼は、彼を呪うために賃金を受け取っていたのに、神がそれを止めました。バラムは彼らを見て言いました。

9 見よ。この民はひとり離れて住み、おのれを諸国の民の一つと認めない。

(民数記 23:9b)

これが、神が、彼らにそうするように、またそうあるようにと命じられた事でした。

おのれを、諸国の民の一つと認めず、ひとりで立て。

信者である皆さんは、世と同じようになるために召されたものではありません。

2 この世と調子を合わせてはいけません。

いや、むしろ？

むしろ、心を新たにすることで、自分を変えていただきなさい。

(ローマ 12:2 新改訳 2017)

自分を変えるとは、「他の皆のようになりたい」という敵の罠に陥るな、ということです。しかし、イスラエルの民は、まず初めに彼らが求めたのは、まさに、他の皆と同じになりたかったのです。全く一人である事や、他と異なっているというのは、非常にエネルギーを使います。時に、世の霊、世の宝、世の慣習を目にすると、ある女の子たちはカーダシアンに憧れます。良い人生のように見えるのです。ある者たちはロックスターに憧れ、またある者たちはスポーツ選手に憧れます。私は、非常に影響力のある人たちを何人か知っていますが、正直言うと、彼らのような人生は絶対に送りたいありません。

イスラエルの民が不満に感じたことの一つは、彼らには、自分たちの神が見えないことでした。もし、神が彼らの王の王、主の主であるなら、何故、他の人たちには自分たちの王が見えるのに、自分たちには見えないのか。

我々も、血肉を持った王が欲しい！

私たちも、タブロイド紙が読みたい！

王室で起こっている話を、私たちも知りたい！

面白いウワサ話を聞かせてよ！

私たちにも、ヘンリー王子、ウィリアム王子を与えてよ！

つまり、私が言いたいのは、これは、私たちの中に埋め込まれているのです。

私たちが考え方を変えない限り、私たちが心を新しくし、神の御霊が私たちの内にない限り、私たちは常に、世のようになることを願い求めます。

実際、あなたの霊的状态を示す指針の一つは、あなたがどれだけ世を愛し、どれほど世のようになりたいと願っているかです。あなたが、聖霊で満たされれば満たされるほど、あなたが、神に近づけば近づくほど、あなたが、世や、世のものを求める気持ちは少なくなります。しかしあなたが、世や、世のもの、世の一部になることを多く求めるなら、あなたが、あまり霊的ではい可能性は、非常に高いでしょう。

私の知り合いにも、ビジネスで成功していて、経済的に豊かなクリスチャンの人たちがいます。ある日、彼らといっしょに車に乗っていたら、彼らは

「今、素晴らしい家を建設中でね、だから、主にはまだまだ戻って来てほしくないんだ。あの家を楽しみたいからね。」

と、そんな事を言うのです。

それを聞いて、私は、

「何!?そんな家の方が良いの?主が、あなたに用意してくださっているものよりも!?!」

と言いました。すると彼らは

「ああ、そうだよ。」

と本当にそう言いました。

そこで、イスラエルの民も、血肉を持った王を求めました。そしてサムエルの所に行って、

「あなたの二人の子どもたちは、墮落している」

などと、あらゆる言い訳を並べたて、そして言いました。

「私たちも王が欲しい。」

「あなたは良い人だけど、私たちは他の者が欲しいのです。」

そこで、第一サムエル8章、彼らがサムエルの所へ行く箇所です。

19 …「いや。どうしても、私たちの上には王がいなくてはなりません。

20 私たちも、ほかのすべての国民のようになり、…

(第一サムエル8:19b~20a)

彼らは文字通り、他のすべての国民のようになりたい、と認めたのです。

神が「滅ぼせ」と言われた国々です。

それが今や、彼らの手本になっていて、彼らは、他のすべての国民のようになりたい、と言います。サムエルは物凄く落胆して、神に言いました。

「神よ。私の何がいけないのでしょうか?何故…?」

そして神は言われました。

「なあ、サムエル。これはあなたの問題ではなく、わたしの問題だ。」

「わたしは彼らに、女も子どもも、馬も食べ物も与えたのだ。しかし彼らは、女、子ども、馬、食べ物を彼らから取り上げる王を自分たちで選びたいと言う。サムエル、どう思う?」

サムエルは非常に落胆しました。

そして、非常に面白いのが、9章2節で、彼らを選んだ新しい王の適性が分かります。

サウル王です。

2 キシュにはひとりの息子がいて、その名をサウルと言った。彼は美しい若い男で、イスラエル人の中で彼より美しい者はいなかった。彼は民のだれよりも、肩から上だけ高かった。

(第一サムエル 9:2)

ワーオ！何と素晴らしい王でしょう！

彼について、我々が知っているのは、ハンサムで背が高い。それだけです。

といっても、ハンサムで背が高いことは、構いませんよ？（笑）

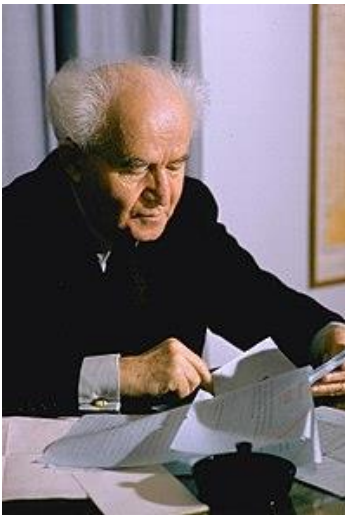
しかしそれは、国に必要な、良い指導者としての資格でしょうか？

外見ですか？

なぜ私たちは、自分たちの指導者を外見で選ぶのでしょうか？

何も役目を果たさないのに、どういうことでしょうか？

私たちの初代首相ダヴィド・ベン＝グリオンを見てください。



ダヴィド・ベン＝グリオン

背が低くて、髪の毛なんかほとんどなくて、横に少しあるだけで、面白い喋り方をする人でしたが、なかなかどうして、彼が当時の指導者であったことを、神に感謝します。

皆さんに言うておきますが、サウルという王には、優れた部分はほとんどありませんでした。確かに、見た目は良かったでしょう。しかし、それ止まりです。

サウルは、私たちの多くを表しています。

皆さん、よく考えてみてください。彼は、正しいことをしようと実に一生懸命頑張りましたよ？彼は、宗教的である時には宗教的で、怒るべきところでは怒り、彼はいわゆる“教科書通り”のを行いました。しかし、彼の心は、他の所にあったのです。人は、他の人を、その人の犯した罪によって計ろうとします。

「ワーオ！あなたの罪は、私の罪よりもはるかに大きい！あなたの隣にいと、自分が聖人のような気がするよ。」

しかし、サウルがした事と、ダビデがした事をよく考えてみれば、それぞれが人生の中で犯した罪を考えると、ダビデなど、神は、絶対に選ばないでしょう。それが、ここでは全く違って、面白いと思いませんか？

第一サムエル 14 章 52 節では、ペリシテ人との戦いが始まりますが、サウル王は、神や、神の助けに依り頼まず、彼が何をしたかといえば、聖書にはこうあります。

52 サウルの一生の間、ペリシテ人との激しい戦いがあった。サウルは勇気のある者や、力のある者を見つけると、その者をみな、召しかかえた。

(第一サムエル 14:52)

彼がより頼んだのは？

兵士の力、彼らの勇気であって、神ではありませんでした。

事実、サウルは非常に不安で、彼は神の御声・ご計画・臨在からはかけ離れていました。そのため、彼は出来る限り多くの兵士、それも最も強く、最も勇敢な者たちを集めました。それが頼りだったのです。

面白いのは、ダビデ自身が詩篇 20 篇 7 節にこう書いています。

7 ある者はいくさ車を誇り、ある者は馬を誇る。しかし、私たちは私たちの神、主の御名を誇ろう。

(詩篇 20:7)

この一節だけで、両者の心の違いが見えるでしょう。

ある者は人の力を信頼し、ある者は主だけを信頼します。

余りにも多くの人たちが、自らを“クリスチャン”と自称しながら、人生の多くの場面で主を信頼する代わりに、富を信頼したり、友を信頼したり、牧師が正しいアドバイスをくれると信頼したりします。しかし、聖霊を通して、神の御声が本当に聞こえるまで、主との関係を育もうとはほとんどしないのです。

恐らく、そういうクリスチャンの方が、神の御声を聞いているクリスチャンよりも多いでしょう。そして、これに関して、本当に厳しい状況の中でしか、私たちが試すことは出来ません。

ということで、サウルはイスラエルの王です。

軍隊はあるべきです。

強い人間は必要です。

そこに何も問題はありません。

しかし、彼の心がそこにあったのです。

神は、その中に含まれてもいませんでした。

私のところにも、いろいろな人からあれこれとアドバイスを求めてメールが届きます。それは構いませんよ。

ただ、あなたは、神に聞きましたか？

祈っていますか？

御言葉に浸っていますか？

この人はああ言うし、あの人はこう言うし、どうしたら良いのか分からない！誰の言うことを聞けば良いの！？

神に聞き従うべきですよ。

誰もあなたに正しいアドバイスを与えることは出来ません。

神と一緒に時間を過ごさなければ、神の御心は分かりません。

さて、第一サムエル 15 章までやってきました。

ここでサウルは、戦いを通して、正しい行いをしようと必死で頑張りながらも、常に間違っただけを行っていたことが明確に窺えます。

彼の人生で欠けていたのは、神との繋がりでした。

彼は、サムエルが来るのをひたすら待っていました。

勝利の後、神にささげ物をしようと思いますが、サムエルが来ません。

そこで彼は何をしたでしょう？

彼が自ら、いけにえをささげました！

興味深い事に、サムエルが 22 節で言っています。

22 …「主は主の御声に聞き従うほどに、全焼のいけにえや、その他のいけにえを喜ばれるだろうか。見よ。
聞き従うことは、いけにえにまさり、耳を傾けることは、雄羊の脂肪にまさる。

23 まことに、そむくことは占いの罪、従わないことは偶像礼拝の罪だ。あなたが主のことばを退けたので、
主もあなたを王位から退けた。」

(第一サムエル 15:22~23)

ワーオ。サウルが責められている間違いはただ一つ。

サムエルが来るまで、それをするのを待たず、自分でささげ物をしたことです。このように神は、すでにサウルの心を見ておられたのです。プライド、高ぶりの心、不従順の心。昨日、ヨッパで学びましたね？しかしそれ以上に、ここでは誰かさんが宗教を演じています。

「我々はいけにえをささげなければならない！彼がいないなら、私がささげよう！」

面白いと思いませんか？彼がしたのは、それだけです。しかし、神にとっては、もうそれだけで十分でした。

「あなたの心は正しい所にはなく、あなたの思いは正しい所にはない。そもそもわたしは、あなたを選ばなかった。それ以前に、わたしの定めている基準は、他の国々とは全く違うのだ。」

そこで、16 章、

1 主はサムエルに仰せられた。「いつまであなたはサウルのことで悲しんでいるのか。わたしは彼をイスラエルの王位から退けている。角に油を満たして行け。あなたをベツレヘム人エッサイのところへ遣わす。わたしは彼の息子たちの中に、わたしのために、王を見つけたから。」

(第一サムエル 16:1)

面白いと思いませんか？神は、落ち込んではおられないのです！

サムエルは落ち込みました。

私たちは、世界中で起こっていることを見て、神も私たちと一緒に座って、落ち込んでおられ、嘆き悲しんでおられると考えますが、いいえ。

神には神のご計画があるのです。

サムエルはへこみました。それは私にも理解出来ます。何故でしょう？

それは、あの男に油を注いだのは、サムエルだったのですから！

預言者がはるばる出かけて行って、間違った男に油を注いだなんて、その気持ちが理解できますか？彼はきっと、やるせない気持ちだったはずですよ。

だからです。

そこへ神は、

「忘れなさい！」と言われる。

「今、正しい者を遣わそう。」

「角に油を満たして、さあ、行け！」

そうして、サムエルはエッサイの所までやって来ます。4節には、こうあります。

4 サムエルは主が告げられたとおりにして、ベツレヘムへ行った。…

(第一サムエル 16:4a)

興味深いですね。ベツレヘムは、人ではなく、神の求める人物を生み出しました。

そして面白いのが、

4 …すると町の長老たちは恐れながら彼を迎えて行った。「平和なことでおいでになったのですか。」

(第一サムエル 16:4b)

サウルというお粗末な選択をした後、サムエルの評判はあまり良くなかったようですね。それが今、彼がやって来て、これから何が起こるかは、神をご存知です。

5 サムエルは答えた。「平和なことです。主にいけにえをささげるために来ました。私がいけにえをささげるとき、あなたがたは身を聖別して私といっしょに来なさい。」こうして、サムエルはエッサイとその子たちを聖別し、彼らを、いけにえをささげるために招いた。

6 彼らが来たとき、サムエルはエリアブを見て、「確かに、主の前で油をそそがれる者だ」と思った。

(第一サムエル 16:5~6)

このようにサムエルは、既に人が考えるように考えていました。しかし7節の神の答えを見てください。恐らくこれが、この全貌のポイントでしょう。

7 しかし主はサムエルに仰せられた。「彼の容貌や、背の高さを見てはならない。わたしは彼を退けている。人が見るようには見ないからだ。人はうわべを見るが、主は心を見る。」

(第一サムエル 16:7)

私はダイエットをするたびに、自分に言い聞かせるのです。(笑)

「人はうわべを見るが、主は心を見る。」

いくら外見が良くても、心が間違っていれば、何の益がありますか？

ということで、ここで、神が他の誰かを見ておられ、それは背の高さでもなければ、外見の良さでもなく、筋肉でもなければ、体型でもなく、大事なものは心であることが分かります。そして、ここでダビデに油が注がれます。12節にはこうあります。

12 エッサイは人をやって、彼を連れて来させた。その子は血色の良い顔で、目が美しく、姿もりっぱだった。主は仰せられた。「さあ、この者に油をそそげ。この者がそれだ。」

13 サムエルは油の角を取り、兄弟たちの真ん中で彼に油をそそいだ。主の霊がその日以来、ダビデの上に激しく下った。…

(第一サムエル 16:12~13a)

面白いと思いませんか？主の御霊が、ダビデの上に下った。

旧約聖書の中では、聖霊が今のように誰かのの上に下り留まることはめったに見られません。

13 主の霊がその日以来、ダビデの上に激しく下った。サムエルは立ち上がってラマへ帰った。

(第一サムエル 16:13b)

ここで、ダビデが正しい人物であることが明確に分かります。

皆さん、ご存知の通り、ダビデはサウルの前に立ち、立琴を弾いていましたが、サウルは彼を見てもいませんでした。



立琴を弾く人 (写真は女性ですが)

そして 17 節に入ります。このために、今私たちはここにいるのです。私たちは今、この谷のすぐ隣にいます。イスラエルとペリシテ人との間でずっと続いていた戦いは、決定的な結果を伴って、終わらなければならなかったのです。

どちらが勝ったのか、一気に決めてしまおう！

どのようにしてそれを行うか？剣闘士の戦いのようなものです。

「こちらからは我々の闘士を送る。そちらはそちらの闘士を送れ。」

そうして彼らは戦い、勝った方が相手を奴隷にします。

聖書は、ペリシテ人は元々、南西部の者だったと告げています。

つまり、イスラエル沿岸のガザ、アシュドド、アシュケロン、こんにちもそうです。

同様に、イスラエル内陸部のエクロン、ガトも。

彼らは、内陸のユダの部族の領土まで前進していた、と聖書は告げています。そして彼らは、この町アゼカと、向こう側の町ソコも占領しました。そこは、ユダのものであったと聖書にはあります。彼らがそこを占領した目的は、——皆さん、戦場はあの谷、我々が今いる場所からはるか向こうの谷までの間だったためです。あちらの谷であって、ずっと向こうの山ではありませんよ？



古戦場について説明するアミールさん

そして興味深いのは、戦いの前にここで起こった非常に面白い事が聖書に書かれています。13 章の終わり、19 節です。

- 19 イスラエルの地のどこにも鍛冶屋がいなかった。ヘブル人が剣や槍を作るといけないから、とペリシテ人が言っていたからである。
- 20 それでイスラエルはみな、鋤や、くわや、斧や、かまをとぐために、ペリシテ人のところに下って行っていた。
- 21 鋤や、くわや、三又のほこや、斧や、突き棒を直すのに、その料金は一ピムであった。
- 22 戦いの日に、サウルやヨナタンといっしょにいた民のうちだれの手にも、剣や槍が見当たらなかった。ただサウルとヨナタンだけが持っていた。

(第一サムエル 23:19~22)

ここでははっきりと分かるように、ペリシテ人がイスラエルの民に農耕器具を与える際、彼ら在必死でイスラエルの民を支配していた目的の一つは、彼らに戦争の武器を作らせないようにするためでした。そこでペリシテ人たちがしていたことは非常に賢明でした。彼らは、誰が何を持っているのか、非常に詳細に書かれたリストを作ったのです。

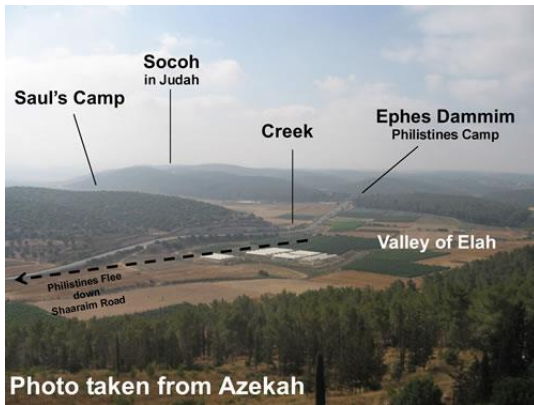
鉄はしばらくすると？——切れ味が悪くなります。

そして、鉄を研ぐのは？——鉄です。

したがって、イスラエルの民は、皆さんがアップルの端末を買うのと同じように、完全に彼らの手に陥ります(笑)。皆さんは彼らの付属品を買わなければなりません。それだけです。あなたは、釣られたのです。私は、アップルがペリシテ人だと言ってるのではありませんよ？(笑)ただ、私が言いたいのは、いつの時代も珍しいビジネスの領域に足を踏み入れると、その必要を提供できるのは、彼らだけなのです。そこでイスラエルの民も、同よりもはるかに優れた仕事ができる道具を手に入れました。しかし、数ヶ月ごとに、彼らはあちらに出かけて行き、お金を払って鉄を研がなければなりません。そして、ペリシテ人はそれを見て、

「ワ～オ、これで金儲けが出来るじゃないか！」

と考えたのです。面白いことに、彼らから購入していないものは持って行けないのです。彼らは、誰が何を持っているかのリストを作り、そこに登録しているものだけを持ち込めるようにしていました。だからもし、わたしが二年間姿を現さなかったら、私はそれを誰か他の人に売ったか、それを使って何か他のものを作ったことを意味します。覚えていますか？剣を持っていたのは、たったの二人。王とその息子だけです。戦争を始めるには、あまりいい方法ではありません。軍全体の中で、二人しか優れた武器を持っていないのです。そこで興味深い事に、第一サムエル 17 章で、谷の名前が「エフェス・ダミム」として紹介されています(1 節参照)。彼らはどうにかここまでやって来て、ペリシテ人たちは谷のこちら側、イスラエル人はこれらの山のこちら側、つまり谷の向こう側にいました。そしてその間に、谷が横たわっていました。これが面白いことに、「エフェス」とはヘブル語で「資金を集める」という意味です。「料金を徴収する。」料金を徴収する場所、恐らく 13 章の終わりに書かれている事から、その名がついたのでしょう。ということで、イスラエルの民は、彼らの“軍隊”を送り込みます。彼らは、これらの山のソコにいて、ペリシテ人たちはいわゆるアゼカを占領しています。そして彼らは、谷の方を向いています。



アゼカから撮影した（ペリシテ人視点）エラの谷

ペリシテ人たちは、彼らの剣闘士、巨人を送り込みました。

彼の名前はゴリヤテ。

巨大な男で、彼の鎧兜は全部で 100 パウンド以上、50 kg です。

これは鎧と剣を合わせた重さで、盾は含まれていません。彼は自分では盾を持たず、しもべたちに持たせていました。彼らが盾を持って、彼の前を歩いたのです。しかもこの男は、体が大きいだけでなく、大口をたたくのでした。きっと声も大きかったはず。それが毎朝、一日に何度も谷に来ては、怒鳴り、神を冒瀆し、人々を冒瀆したのです。たぶん、この男の外見、声、彼の言った言葉の内容に、人々は恐れおののいたのでしょう。ダビデは何も恐れない男でした。

彼に恐れというものはありませんでした。

もちろん時として、敵が彼を狙った際には、彼も恐れましたが、それでもダビデは、非常に勇敢な少年であったことが分かっています。彼が獅子を殺したこと、熊を殺したこと、そして彼が行なったことを、私たちはよく知っています。

そして、詩篇 53 篇に、それが明確に見られます。

4 不法を行う者らは知らないのか。

彼らはパンを食らうように、わたしの民を食らい、神を呼び求めようとはしない。

5 見よ。彼らが恐れのないところで、いかに恐れたかを。

それは神が、あなたに対して陣を張る者の骨をまき散らされたからだ。

あなたは彼らをおろそかにした。それは神が彼らを捨てられたからだ。

（詩篇 53:4~5）

皆さん、言っておきますが、イスラエルの民は、彼らの敵を恐れさせる代わりに、自分たちが恐れたのです。これが、最大の転落です。彼らの敵の一部であるはずのものが、彼らの側にあったのです。

神の御言葉によれば、誰でもイスラエルに敵対する者が恐るべきなのに、ここでは誰が恐れていますか？——イスラエルの民です！

恐らく、彼らはそれほどまでに、世に順応していたのでしょう。

そして、興味深いのは、そこへダビデが兄たちの食糧を手に、はるばる山を駆けてやって来たのです。



エラの谷の位置(画面左側矢印)とベツレヘムの位置(画面右側矢印)

ベツレヘムは、あちら(画面左側)の山の方へ、約20マイル(32km)離れています。ですから、ダビデは結構な距離を走って来たのです。

兄たちのために、チーズとパン、食べ物を持ってはるばるここまでやって来ました。ところが彼の兄たちは、ダビデを嫌い、馬鹿にしていました。馬鹿にするどころではありません。当時の羊飼いは最も身分が低く、皆、羊飼いを避けていました。理由の1つは、臭かったからです。彼らは一日中、羊と一緒にいたからです。そのため、羊飼いと羊は、町の中に入ることも許されませんでした。彼らは人々から非常にさげすまれていて、羊飼いの証人は、裁判所では決して受け入れられませんでした。このように彼らは、まじめに取り扱われず、周りにいるだけで嫌がられ、最も身分の低い者だったのです。そこへダビデは、羊を父エッサイの元に残して、父親の言いつけに従ってはるばるここまでやって来ます。ところで、ダビデは大部分において非常に従順で、忠実な人でした。だから彼は食料を持って、はるばるここまでやって来たのです。

ところが兄たちは、それを喜びませんでした。

なぜでしょう？

それは、ダビデがショックを受けたからです。

「あなたたちに対して、また、あなたの神に対して、あんな風に言う者を許しておくなんて、一体全体どういう事なんだ!？」(第一サムエル記17:26参照)

覚えていますか？

この二つ前の章で、ダビデの上には、神の霊が下がっています。

神の霊が下ると、神や、神の民を冒瀆し嘲笑うのを聞いて、怒らずにはいられないはずですが、少なくとも、同意は出来ないでしょう。不正が受け入れられ、実行されるのを見ていられないはずですが、神の御霊はあなたに言うでしょう。

「何かが間違っている。」と。

こんにちの教会の最大の問題は、大部分において、聖霊の欠如です。

正直に言えば、私が聞いたある説教では、無関心か、もしくは政治的立場、社会的立場、経済的立場、その多くは物凄く神に敵対する霊的立場を取り、またそれを奨励しています。これは、聖霊の欠如に間違いありません。

聖霊があなたの上に臨み、あなたの中にあり、あなたを通して働かれるなら、神の御霊と矛盾することは絶対にありませんから。これこそが、神の御霊です。

ですから、ここにいた人たちが、神の御霊を持っていなかったのは明らかです。

しかし、それを持っていた者は、ここで目撃し、耳にしたことに我慢がなりません。それは、こんにち

の私たちも同じです。

もし、あなたが世で起こっていることに対して無関心であるなら、現在、アメリカやヨーロッパ、世界の他の場所で起こっているとんでもない現実に対して、あなたが何とも思わないなら、何かの間違っていています。

ということで、ここではダビデがそれを認めず、戦おうとしています。

覚えていますか？サウルは常に、国の中で最も強く、最も勇敢な人々を集めていたのです。彼は意気地なしの集団とここに来ていたのではありません（第一サムエル 14:52 参照）。彼は、勇敢な戦士たちを連れてここに来ていたのに、その誰一人として、ゴリヤテと闘おうとはしなかったのです。何かをしようとする勇気や根性のある者が、誰もいなかったのです。

それが、幼いダビデが羊や山羊を残して、はるばる 20 マイル（32 km）の距離を喜んで走ってやって来ると、兄たちは、「お前は自惚れて高慢だ」と言って、嘲笑いました。

皆さんにも言うておきます。

あなたも必ず、世から「間違っただけをしている」と非難されます。

彼らは、あなたを間違っただけ人間だと言います。

あなたが過激で、高慢で、革命派で、あなたが世の問題である、と。

ダビデがやって来て、彼がただ一人戦おうとした者なのに、兄たちが怒りをあらわにしたのは、ゴリヤテにではなく、ダビデにだったのです。彼らはあるうことか、ゴリヤテを恐れ、その上ダビデに対して腹を立てたのです。

こんにちの世の人たちも、悪を恐れ、あらゆる悪の現れを恐れます。

それなのに、彼らが非難するのは誰ですか？

彼らが敵対するのは誰ですか？

神の民です。

そこでダビデは、自分が戦おう！と決意します。そして、進み出ます。

サウルはもちろん、覚えていませんでした。

これは立琴を弾いていた少年だ。

サウルは、自分が落ち込んでいた時、この同じ少年が立琴を弾き、それで自分が立ち直ったことを、彼を認識することすら出来ませんでした。

そこへダビデが進み出ると、

「よし。それなら準備をしよう。こうするんだ。こう言って、これをする。」

ここでもまた、聖霊の入る隙はありません。

「剣も、盾も、全て与える。」

こんにち、人々は出て来て、全く影響力のない説教をします。

それは、聖霊が語っていないからです。

「正しいやり方でしなければ。」

「そのやり方を教えてあげよう。」

「メッセージの仕方を教えてやろう。」

そしてダビデは、動けませんでした。

鎧が重たくて。まず第一に、ダビデは小さかった。

私たちが知っている通り、サウルは非常に背が高くハンサムでした。

ハンサムでしたが、背が高かった。明らかに、盾や鎧は、ダビデに合わなかったでしょう。

しかし、真実を言えば、たとえ鎧がぴったりフィットしていたとしても、ダビデには快適ではなかったはずです。それは、ダビデではありませんから。

このように、聖霊があなたのうちに宿り、あなたの上に臨むと、主が大きな自由を与えてくださり、大きな勇氣、物凄い大胆さを与えてくださるのです。

それまで感じたこともないほどのもの、決して自分が生まれ持ったものではないものです。

そこでダビデは、自分にはこれは使えない、自分は自分のやり方で行くと決め、この丘から下の小川の岸まで走って行きます。その小川の岸には、今でもなめらかな石があります。雨が降るとそこに流れ込み、石を滑らかにするのです。



ダビデが走って行った小川（左）と小川にある小石（右）

3000年経った今でも、そこにはまだ石があり、その石は今でもなめらかです。

そこでダビデは、5つの石を集めます。

ここで、なぜ5つなのかを説いた説教をいくつか聞きましたが、そもそもどうして、それほどこだわる必要があるのですか？なぜ5つか！5人の巨人とか、5つの町、5日間だとか、5倍だとか？（笑）

皆さん、落ち着いて！（笑）

そうです。彼は5つ拾いました。

しかし、彼に必要だったのは一つだけでした。そうです。



投石紐でゴリヤテに攻撃するダビデ

そして彼が、あの投石紐であの石を投げている時、彼は一つの石で勝つことが出来る、と信仰によって行なっていたのです。

ダビデは、一つ目を投げて、すぐに二つ目を入れ、直ちに三つ目を入れた、というわけではありません。一つで十分でした。

そしてその一つが、彼の立っていた場所からはるばるあの谷の真ん中。茶色い場所まで飛んで行きました。そしてそれは、ゴリヤテの額のだ真ん中に命中した、と聖書は語っています。彼は鎧で全身を覆っていましたが、唯一、覆われていない所に石が当たったのです。これには、驚きです。

まず第一にゴリヤテは、ダビデが本物の武器を持って向かって来ないために激怒しました。考えてみてください。大男が、大盾と盾持ちまでつけて、100 パウンドもの鎧を着けているところに、小さな少年が、鎧もつけず、剣も何も持たないで、走りながら向かって来るのです！（笑）唯一集めて来たのは、石だけ！？

43 …「おれは犬なのか。…」

（第一サムエル 17:43）

石は、犬に投げるものですよ。人を相手に、そんな風に戦おうなんて思いますか？

ええ。

ダビデは、自分が負けるとは、一瞬たりとも考えませんでした。これが負け戦であるなど、ダビデは心の中で、一瞬たりとも考えませんでした。

私が一番恐ろしいと思うのは、クリスチャンの中に、敗北の霊があるのを見た時です。

私たちは？

「圧倒的な勝利者です！」

それが、私は怖いのです。

このように、45 節でダビデがはるばるやって来ると、明らかに

45 **ダビデはペリシテ人に言った。「おまえは、剣と、槍と、投げ槍を持って、私に向かって来るが、私は、おまえがなぶったイスラエルの戦陣の神、万軍の主の御名によって、お前に立ち向かうのだ。**

（第一サムエル 17:45）

主は私の盾。主は私の岩。主は私を贖う方。主は私のやぐら。主は私の避けどころ。

ダビデは大きな経験を通して、これら全てを詩篇に記したのです。

主は戦場において、彼の盾でした。

私たちはこれを歌い、手を上げますが、彼はそれを経験したのです。

そして面白いのは、彼は預言までしているのです。ダビデはこう預言して言っています。

46 **きょう、主はおまえを私の手に渡される。私はおまえを打って、おまえの頭を胴体から離し…**

（第一サムエル 17:46a）

大半の人が、ゴリヤテは石で死んだと考えていますが、違います。

石は、ゴリヤテを倒しましたが、彼を殺したのは石ではありません。



カラヴァッジョ画「ゴリアテの首を持つダビデ」

ダビデが、ゴリヤテの剣を使って、ゴリヤテの頭を切り落とし、ゴリヤテを殺したのです。これについて少し掘り下げてみましょう。

ダビデが、ゴリヤテの剣を使って、ゴリヤテの頭を切り落とし、ゴリヤテを殺した。

「明日から罪を止めよう！インターネットの時間を減らそう！」

皆さん、石ではありません。

頭を切り落とすのです。

ただ倒すだけでは、あなたの人生の中のゴリヤテを打ち負かすことは出来ません。

頭を切り落とさなければなりません。

大勝利を収めるには、「ほぼやり遂げた！」というのでは足りません。

なぜなら、言っておきますが、もし石だけだったなら、ゴリヤテは死んでおらず、イスラエルの民は何も宣言出来なかったはずで。

ゴリヤテの頭を切り落としたから、出来たのです。

ところで、それは勢いでしたのではありませんよ？

ダビデは、次に何をすべきかを知っていたのです。

ダビデは、「おまえの頭を、おまえの胴体から切り離す！」と言いましたから。

ダビデは、自分がそれをしない限り、勝利はない事を知っていたのです。

当時は、敵の王を殺さない限り、勝利を宣言することは出来ませんでした。だからギデオンは、ミデヤン人の二人の王を捕まえて殺すまで（書記注：士師記7章参照）、約100マイルもの道のりをはるばる追いかけて行ったのです。そうして初めて、勝利宣言が出来るのです。ですから、ここでもしゴリヤテが死んでいなければ、勝利はなかったのです。

そして、まさにここで勝利が達成されたのです。

それは、まさにここでダビデが最後まで行なったからです。

そしてゴリヤテは死に、ダビデはゴリヤテの頭を掲げました。

文字通り、彼がゴリヤテの頭を見せたのは、イスラエルの民に向けてではありません。彼らはその場にいたからです。彼は、この前哨（アゼカ）にいたペリシテ人達と、あちら側の前哨（エフェス・ダミム）にいたペリシテ人たちに見せたのです。

「見ろ！俺はお前たちの巨人の頭を手に行っているんだ！体は、ここにある！」

その時、ここにいたペリシテ人たちは逃げ出し、イスラエルの民が彼らを追いました。ペリシテ人たちは至る

ところに逃げました。

皆さんに理解しておいてほしいのは、聖霊の役割と、ダビデの謙虚さです。

ダビデは、強い者を集めませんでした。いい格好をしようとしませんでした。

ダビデは鎧を着けたり、世のやり方ではしようとしませんでした。

ダビデは神のやり方で、物事を行ないました。

ただ、興味深いのは、ダビデが完璧ではなかった点です。

私たちの誰一人として、完璧な者はいません。

私はたびたび思うのですが、神の御霊がダビデの上を下って以来、彼は迫害されたり、いろいろなことがありましたが、後にダビデはイスラエルの王になりました。

そして神は、ダビデに美しい宮殿を建てるための材料や人、石工たちを送られました。彼はそのためにお金を払う必要もなく、彼は指一本、動かす必要がありませんでした。

そして彼が、成功の絶頂、キャリアの絶頂にあった時、——

ようやく誰からも逃げる必要がなくなった時、

ようやく彼がイスラエル王国全土を統一し、

その首都に立って、彼の宮殿から下を見下ろしていた時、

その時に、罪が彼を捉えました。(書記注：第二サムエル 11 章参照)

私たちが成長の絶頂にいることは可能です。

しかしだからといって、私たちが動じない、ということではありません。

それは罪だけではありません。

ダビデは否定することも出来ました。

もちろん、彼はとんでもない事をしましたよ？

しかし預言者ナタンに、バテ・シェバとのこと、彼女の夫のことを指摘されると、ダビデは即座に、最も霊的な形で、御霊に満たされた者の反応をしました。それは、

13 …「私は主に対して罪を犯した。」…

(第二サムエル 12:13a)

罪を指摘する時、常に二通りの反応があり、

- ① 霊的な人は、即座に悔い改めます。
- ② そうでない人は、即座に否定し、攻撃的になります。

皆さんに知っておいてほしいのは、一つ、ダビデが恐れていたのは、神の御霊が彼から取り去られることです。一つ、私たちが恐れるべき事があるなら、それは罪を犯すかどうかではありません。私たちはだれ一人として完璧ではないからです。私たちが失敗した時にすべきことは何でしょう？

私たちは、互いに罪を告白することの大切さ、

キリストの血で、自分を清めることの大切さ、

そして聖霊を悲しませない事、前進することの大切さを理解しているでしょうか？

パウロが実に明確にしていますが、私は、信者になって以来、一度も罪を犯した事のない人などいないと思っています。そして私が思うに、神はあなたが完璧かどうかを見ておられるのではなく、神はあなたがどのよう

に応じるかを見ておられるのです。

悪魔は、吠え猛る獅子のように、食い尽くす獲物を、右に左に移動しながら狙っています。私たちも、人生の中でこのようにあるべきです。私たちは倒れますが、立ち上がって告白し、悔い改めて前進しなければなりません。他に選択肢はない、と私は思います。

ダビデ自身も、神の御前に出て、次のように言っています。

12 あなたの救いの喜びを、私に返し、喜んで仕える霊が、私を支えますように。

(詩篇 51:12)

この前の 10 節にも、

10 神よ。私にきよい心を造り、ゆるがない霊を私のうちに新しくしてください。

11 私をあなたの御前から、投げ捨てず、あなたの聖霊を、私から取り去らないでください。

(詩篇 51:10~11)

この一つ、「私は、聖霊なしでは生きられない。」

あなたのご臨在がなければ、私は自分自身を見ることも出来ません。

そしてダビデは言います。

大事なことは、いけにえをささげることでも、他の何でもなく、大きないけにえです。

17 神へのいけにえは、砕かれた霊。砕かれた、悔いた心。神よ。あなたは、それをさげすまれません。

(詩篇 51:17)

これを神は、私たち全員に求めておられるのです。

19 そのとき、あなたは、全焼のいけにえと全焼のささげ物との、義のいけにえを喜ばれるでしょう。そのとき、雄の子牛があなたの祭壇にささげられましょう。

(詩篇 51:19)

ダビデは、神の御心にかなった王でした。

そしてダビデは、神の臨在の中にいたいと願いました。

ダビデは、神の御霊を持ち続けることを求めました。

そしてダビデは、他の人が理解していないことを理解していました。

詩篇 52 篇 7~9 節で、ダビデはこう語っています。

7 「見よ。彼こそは、神を力とせず、おのれの豊かな富にたより、おのれの悪に強がる。」

8 しかし、この私は、神の家にあるおい茂るオリーブの木のような。私は、世々限りなく、神の恵みに抛り頼む。

9 私は、とこしえまでも、あなたに感謝します。あなたが、こうしてくださったのですから。私はあなたの聖徒たちの前で、いつくしみ深いあなたの御名を待ち望みます。

(詩篇 52:7~9)

これが、神の求める王の心です。

これが、神の求める男性、女性の心です。

あなたは誰を信頼しますか？あなたは現在、あなたの人生のどこにいますか？

困難が襲った時でさえ、苦難、試練の時にも、あなたは、とこしえまでも主を信頼しますか？それともあなたは、結果次第の条件付きで主を信頼しますか？

ダビデは、「私は、とこしえまでも、主に信頼する」と言いました。彼は、主の恵みとあわれみを信頼しました。ダビデは、イエスを見てもいないのです。だとしたら、神の無償の恵みと、永遠のいのちという賜物を受け取った私たちは、どれほど信頼すべきでしょう。

さらに、新しい心を受け取った私たち、聖霊の証印を押された私たちは、より、主の道を歩むべきで、主の御言葉を信頼すべきです。主のご臨在を追い求め、決して、何一つとして、状況で判断するべきではありません。

私は、とこしえまでも主を信頼する。

アーメン。

【写真出典一覧】

地中海沿岸地図：Wikipedia “Ashdod”

テレビンの木：聖書の植物—樹木 (16) —「テレビンの木」 同労者 第55号 (2004年5月号)

モレクに子どもを生贄として捧げる：Wikipedia “Moloch” Offering to Molech (illustration from the 1897 *Bible Pictures and What They Teach Us* by Charles Foster)

ダヴィド・ベン＝グリオン：Wikipedia 「ダヴィド・ベン＝グリオン」

立琴を弾く人：Bridges For Peace のフェイスブックより “If you’ re entering the Old City through the Jaffa gate you might see this young lady playing her harp. Such beautiful music!” 2018.6.13

古戦場について説明するアミールさん：動画より

アゼカから撮影した（ペリシテ人視点）エラの谷：Galyn’ s Israel Photos

エラの谷の位置とベツレヘムの位置：書記所有イスラエルの地図（矢印は書記がつけたもの）

ダビデが走って行った小川：動画より

小川にある小石：動画より

投石紐でゴリヤテに攻撃するダビデ：「偏見で語る兵器 bot」のツイッターより 2017/12/09

カラヴァッジョ画「ゴリアテの首を持つダビデ」：1607年制作 オーストリア ウィーン 美術史美術館蔵